

2013 年度
学部卒業論文

外国語学習における新たな学習環境の構築

-ドイツ語学習 Web 教材『D⇔J』の開発・運用・評価-

慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科

ログイン名：s10655sh

学籍番号：71006554

花野沙也香

担当教員：藁谷郁美教授

目次

1	研究背景	6~
1.1	SFC のドイツ語授業カリキュラム	6
1.2	ドイツ語学習における問題点	9
1.3	本研究のねらい	10
2	先行研究	11~
3	先行作品	16~
3.1	Web 教材	16
3.1.1	ロゼッタストーン	
3.1.2	東京外国語大学言語モジュール	
3.1.3	ドイツ語を学ぼう	
3.2	スマートフォン教材(App store)	20
3.2.1	翻訳機	
3.2.2	nemo Deutsch	
3.2.3	busuu	
3.2.4	入門独単語	
3.2.5	会話マスター	
3.3	本	22
3.3.1	『ドイツ人が日本人によく聞く 100 の質問』	
3.3.2	『日本語から引く 知っておきたいドイツ語』	
3.3.3	『日本文化紹介小和独辞典』	
4	仮説	25

5	教材『D⇔J』の制作	26~
5.1	教材の目的	26
5.2	技術的な手法	27
5.2.1	語彙の選定と収集	
5.2.2	画像の収集	
5.3	教材制作	28
5.3.1	デザイン	
5.3.2	全体の構造	
5.3.3	使用方法	
6	実証実験	36~
6.1	被験者	36
6.2	実験の仕様	37
6.3	実験結果	39
6.3.1	事前アンケート結果	
6.3.2	事後アンケート結果	
6.3.3	考察	
7	今後の展望	46~
7.1	音声データの追加	
7.2	カテゴリーやテーマの追加	
7.3	スマートフォンや携帯電話への対応	
7.4	Webに頼らない、学習アプリケーションの開発	
7.5	多言語対応	

8	参考文献	48
9	図表一覧	50~
10	謝辞	52
	付録	53
	付録 1 事前アンケート	
	付録 2 事後アンケート	

概要

本研究は、Web 学習教材『D⇔J』の開発・運用・評価を通して、学習言語を用いて自分の言語文化を捉え直すプロセスを、学習要素として提示した。日本でドイツ語を学習する場合、ほとんどの学習者にとって自分のバックグラウンドである日本の伝統や文化、社会的習慣を、学習言語であるドイツ語で説明する場面に遭遇する必要性が生じる。本教材は、他者との接触場面において、翻訳が難しく、抽象度の高い事象をドイツ語で発信することができる運用能力の向上を目的とする。「話す」ことが実践されることを念頭に置き、知識として有用なドイツ語語彙や表現を収集・データ化することで教材としての充実度を高め、プログラムとして使用可能にすることで、学習者の学習環境として機能させることに重点を置く。同時に自分の背負う日本の文化的要素をドイツ語で表現するプロセスを通して、自分の文化的背景をメタレベルで捉え直すことにもつながるのではないかと考える。教材作品の開発に際しては、インターフェースを重要視したことにより学習者の外国語学習に対する興味を高め、より動機付けを継続させながら取り組める学習環境を提供することに目標を置いた。本研究では、Web 学習教材『D⇔J』の開発、運用と、学習者に与える影響について被験者を対象とした評価を通して考察する。

キーワード

学習環境、外国語、自己発信、Web 教材、文化

1. 研究背景

1.1 SFC のドイツ語授業カリキュラム

まず、本章では、研究背景となる慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（以下、**SFC**）のドイツ語教育カリキュラムについて説明する。

SFC のドイツ語教育は、コミュニケーション・アプローチ、問題発見・解決型のアプローチに基づいているため、学習者が自ら発信を行うことに重点が置かれており、学習者主体の実用的なドイツ語の習得を第一目標としている。特に初級では、「日本人が必要とするコミュニケーションの場と話題を土台とし、そこにキーセンテンスと単語をもり込み、文法事項を補足として扱っている」¹。また、教室内授業とは別に、夏期休暇や春期休暇中にドイツ語海外研修に参加することで単位取得も可能である。以上の授業内外の **SFC** ドイツ語科目カリキュラムをまとめたドイツ語履修モデルは図 1 の通りである。

¹ **SFC** ドイツ語研究室。ドイツ語履修概要。

<http://deutsch.sfc.keio.ac.jp/umriss.html> (2013/12/10 参照)

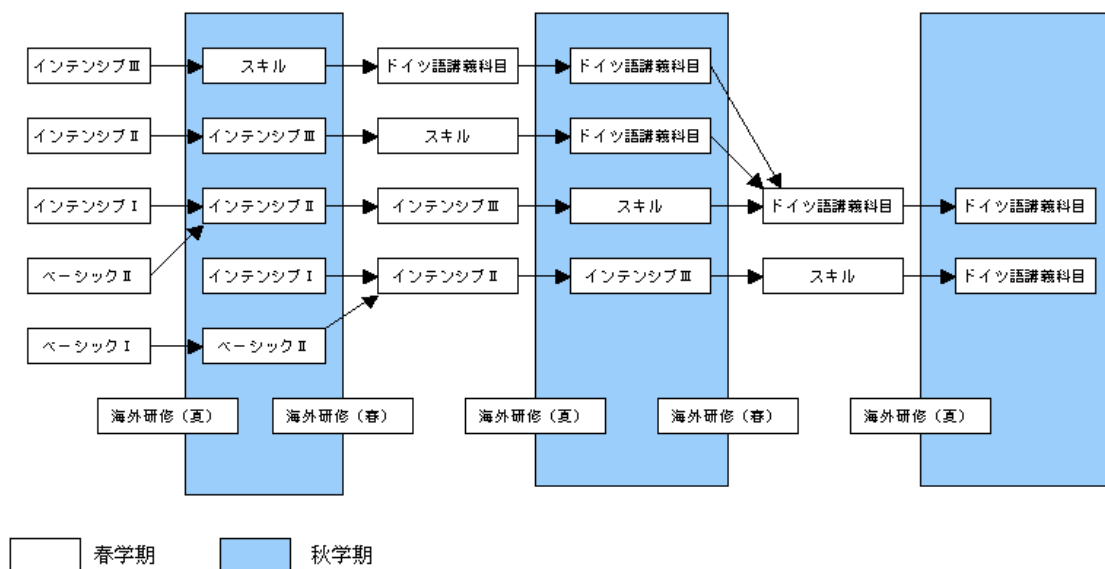


図 1 ドイツ語履修モデル

ドイツ語初習者向けのコースには 2 種類あり、一つ目はインテンシブで週に 4 回の 100 分授業、二つ目はベーシックで週に 2 回の 90 分授業がある。これらのコースは授業数に差があるだけで、教材はどちらもドイツ語研究室が作成した教科書『問題発見のドイツ語 Modelle』²を利用している。

そのタイトルにもあるように、「問題発見・解決型の学習を軸に主体的に学習能力を開発していけるように、さまざまな工夫をこらして…」(Modelle1 p.3)いるため、日本でのドイツ語学習の従来の文法シラバスとは異なる、機能シラバスをもち込んでいる。例えば、ビデオやスケッチの登場人物は、SFC の学習者および教員という設定であり、その舞台も SFC キャンパス内およびその周辺となっている。つまり、SFC の学習者が身の回りに起こりうる事例を用いているので、それを表現するためのドイツ語学習に特化した教科書なのである。

² 平高史也, Riessland Andreas, 木村護郎 クリストフ, 藁谷郁美, Marco Raindl, 太田達也. CD 付ビデオ教材『問題発見のドイツ語 Modelle』

SFC の教室内授業のサイクルは以下図 2 の通りである。

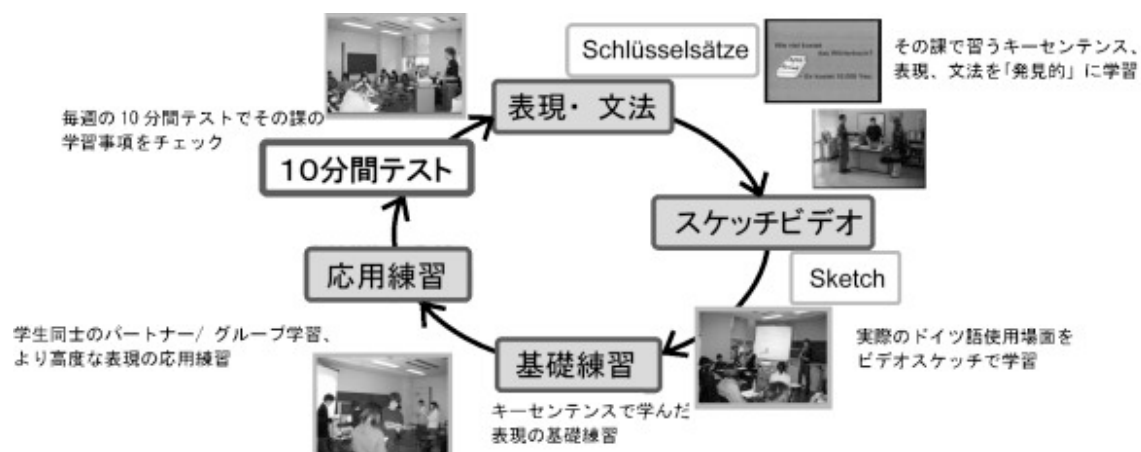


図 2 SFC 教室内授業サイクル

このようなサイクルを通して、より実践的なドイツ語を何度も繰り返し学習することによって、インテンシブ 2 またはインテンシブ 3 終了後には、多くの学生が現地での意思疎通や意見交換ができる能力を身につけている。

そして、この教室内学習で得た知識を実践する場がドイツ語海外研修なのである。外国語学習において、とりわけ学習者自身のコミュニケーションを主軸としている **SFC** のドイツ語科目において、当該言語および当該言語圏文化接触場面の中で実践を重ねることの重要性は議論の余地はないであろう。

1.2 ドイツ語学習における問題点

以上のように **SFC** では自ら発信することに重点を置いた教室内学習を行っている。しかし、実際の異文化接触場面においては、学習者自身のバックグラウンドとなる文化や習慣を表現し合うことが重要になるのではないだろうか。日本人の日常生活の根底となっている文化や習慣を改めて理解し、それを発信できる能力を身につけることによってより深く異文化間の交流を計ることができるのではないかと考える。

しかし、日本の文化や習慣などについて学習することができるような既存教材はそれほど多くはない。ドイツ語圏文化接触場面を想定している **Modelle** でも、多くの課でドイツでの生活場面などを取り上げているが、本研究で扱う対象である、日本文化や習慣をテーマに取り上げている課は以下 2 カ所である。

1. Modelle1 Lektion9 Eine Tour durch Kamakura

この課では、文法事項として①冠詞類の格変化、②3 格と 4 格の基本的用法(1)、③3 格をとる主な前置詞、の 3 つを学ぶ。この文法事項と関連づけて、鎌倉を巡るツアーを提案しているダイアログが掲載されている。

2. Modelle3 Lektion5 Sind die Japaner Buddhisten?

この課では、文法事項として①接続語句の用法、②訪問の際の表現、③ -ismus / -istisch / -ist、の 3 つを学ぶ。そしてこの文法事項と関連づけて、正月や節分、七夕祭りなどの日本の祭りや日本人の宗教観について述べているダイアログが掲載されている。

以下、表 1 に上記 1、2 の課に登場する日本文化や習慣に関連した語彙を示す。

ドイツ語語彙	日本語訳	ドイツ語語彙	日本語訳
Daibutsu	大仏	Tempel	寺
Schrein	神社	Neujahrsfest	正月
Neujahrskarte	年賀状	Los	おみくじ
beten	祈る	binden	結ぶ
In die hände klatschen	柏手を打つ	Schlagersendung	歌謡番組
Setsubun	節分	Sojabohne	大豆
Teufel	鬼	Bambus	笹、竹
Sternenfuest	七夕祭り	Prinzessin	王女
Milchstraße	天の川	Kuhhirt	牛飼い
Buddhismus	仏教	Buddhistisch	仏教の
Buddhist	仏教徒	Schintoisums	神道
Schintoistisch	神道の	Schintoist	神道信者

表 1 Modelle に掲載された日本文化や習慣に関する語彙

しかしながら、学習者の文化的背景は多様であり、発信したいと考えるコンテンツは幅が広く、授業教材だけでこれらすべての条件を網羅することは難しい。この問題意識から、本研究においては、学習者の日常性と密接に連動するテーマをまずは調査し、そのコンテンツを学習教材として捉え直す作業を進めた。同時に、これらを教材データとしてだけでなく、学習プログラムとして機能させることにより、教室の外で各学習者がおこなうインフォーマル・ラーニングのための学習環境構築への位置づけを可能にするのではないかと考える。

1.3 研究のねらい

研究背景で述べた通り、**SFC** では海外研修はドイツ語学習の成果を発揮する場として位置付けられている。本研究の活動の場である **Learning Design Project** (以下、**LDP**) では、今日に至るまで数々の学習教材が学習者自身によって開発され、それら学習教材の多くは他の学習者が誰でも利用できるように学習サイト **d-mode**³に集約、運用されてきた。その教材の多くはドイツ語学習初習者向けのコンテンツから中上級レベルに向けたものまで、**SFC** のドイツ語授業で採用されている教材『**Modelle**』シリーズに準拠した教材が多い。**SFC** のドイツ語学習理念としても、自己発信能力を重視している。しかしながら、日本独自の文化や伝統など、抽象度の高い事象を他者に発信できるための運用能力を培うことは、教室内の授業だけでは不十分である。

本研究において開発した教材システム『**D⇄J** (ディー・ジェー)』は、ドイツ語海外研修において学習者が遭遇する様々な他者との接触場面を想定し、日本の文化や習慣を自己発信するために有用な語彙や、すぐに実用できることを目指した比較的短い表現方法を、教材コンテンツとして作成した。想定する学習者は、おもに海外研修や留学、フィールドワーク活動等の準備として、あるいはドイツ語圏滞在中の補助教材としての学習である。

同時に、本教材を通して、学習者が他言語で自発的に発信したいという動機付けを高めるとともに、自分が背景として持つ日本の文化、社会、習慣を、別の言語で捉え直し、自分を取り巻く環境について、他者に向かって発信する能力を身につける、メタレベルでの学習へと導くことができるのではないかと考える。

³ d-mode ドイツ語を自分で学べる web サイト <http://dmode.sfc.keio.ac.jp/>(2013/12/10 参照)

2. 先行研究

外国語学習者はどのような教室内授業を必要としているのだろうか。岡田(2012)⁴は、言語運用以外の、言語の背後にある文化や社会的側面に、どこまで踏み込み、どう教えるべきかという問題を、学生に対するアンケート調査をもとに明らかにしている。ただし、このアンケート調査は北海道大学の初習外国語履修者への調査であるので、一般化可能であるか否かは議論の余地は残されている。

授業で扱う内容についての質問項目で、対象の言語についてのみの学習でいいという学生は約 16%に過ぎず、残りの約 84%の学生は言語以外の要素も同時に学びたいと考えていることがわかった。その理由として挙げられた、A)文化や社会の知識はスペイン語を理解する上で必要だから、B)語学は文化と社会を勉強する手段であると思われ位置づけられると思うから、D)少なくとも自分は言語としてのスペイン語以上に社会や文化に興味があるから、という3つの選択肢は、それぞれ理論が少しずつ異なるものの、文化情報が授業で提供されることに積極的な意味を見いだしているものである⁵。この結果から、学習者は言語の背景にある文化や社会についての学びの必要性を理解しており、教室内授業で学びたいと考えていることがわかる。

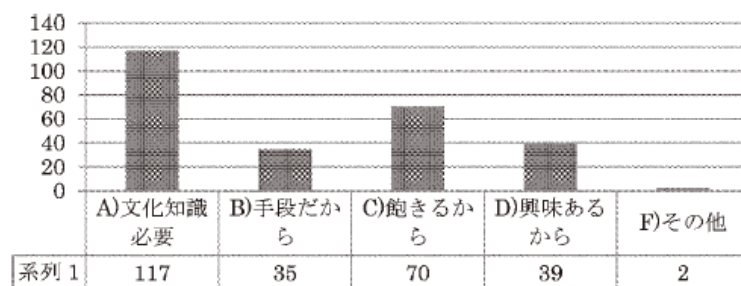


図3 対象の言語以外の要素を学びたい理由

⁴ 「初習外国語としてのスペイン語の授業や教材のあり方と、社会や文化に関する理解について：学生の要望や教科書の使い方の分析」

⁵ 同上 p.31

さらに、「文化や社会に関する情報」とはどのようなものか、という問いに対して、**A) 難しいこと**よりも身近なこと、**D) 教員の個人的な見方**、ものごとの解釈、経験、**F) 最近議論されたり、注目されていること**について、の選択肢を選んだ学生が多く、授業内で提供してほしいと思っていることは、身近なことに関する情報であり、「難しいこと」よりもまずはふつうの人々の日常生活をイメージできる情報である⁶ということが明らかになった。しかし、ここで言われている“文化や社会”とは学習言語文化圏の文化や社会についての情報であり、日本の文化や社会を発信するという面にはフォーカスが当てられていない。

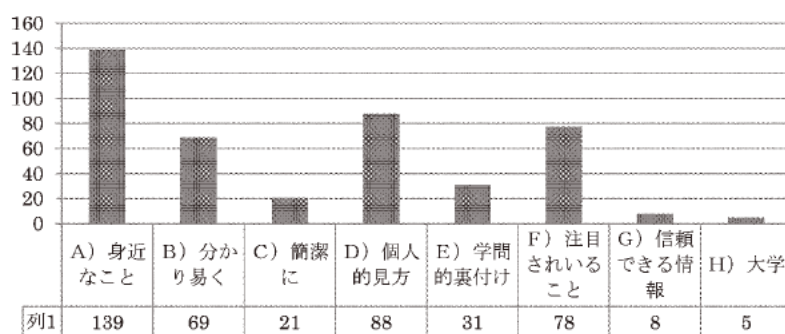


図 4 文化や社会に関する情報とは何か

日本人学習者は履修外国語の文化や社会についての興味はあるものの、その知識を得られる教材が不足していると示しているといえる。その点において、**SFC** 独自の学習教材 **Modelle** はドイツ語圏の文化や社会に関しての多くの情報を提供しており、また、ネイティブの教師も多く授業を担当しているため、学習者がドイツの文化や社会に関する情報を手に入れられる環境は整っているといえるだろう。

しかし、それに対して日本独自の文化や習慣といった翻訳の困難な情報を自己発信するために必要な語彙や情報を学習する教材等の環境はまだ整っておらず、今日まであまり言及されることも少なかったのではないだろうか。

⁶ 同上 p.32

また、言語学習者が対象言語の文化や社会などを学ぶことの重要性は張慧芬(2013)⁷によって示されている。従来の言語教育においては、言語形式が重要視されているため、音声、語彙、文法などが主導的な位置になっているが、学習者の総合的な言語運用能力の養成は疎かにされやすいようである。

アメリカの言語学者Edward Sapirは、「言語の背景には目に見えないものがあり、しかも言語は文化と切っても切れない存在である。いわゆる文化とは、社会に伝わった習慣や信仰の総合体である」と述べている。つまり、言語は文化の一部で、文化は言語を内包する大きな体系である。他の言語を学習するということは、他の文化を学習することである。よって、第2外国語の学習者にとって、言語機能を習得するだけでなく、対象言語の文化を知ることも大事なことであるといえる。⁸

張(2013)は、学習者が母国語以外の言語を習得するためには、言語の背景となっている文化を知ることの重要性を述べている。前述の通り、岡田(2012)によって、学習者は対象言語圏の文化や習慣を知ることに対する必要性を感じていることは示されているため、学習者が対象言語の文化や習慣を学ぶことの重要性は示されたと言えるだろう。

以上のように、学習者が対象言語圏の文化や習慣を学ぶことの重要性は述べられてきたが、母国の文化や習慣を自己発信することの重要性は述べられていない。コミュニケーションにおいては相手を知ることが確かに重要だが、あくまで双方向なので、母国の文化や習慣を自己発信していかなければならないのではないだろうか。

田中(2012)はコミュニケーションに対する積極性によって期待される学習効果について述べている。

⁷ 「外国語教育における文化元素の導入について ―初級レベルの中国語学習者を中心に―」
(2013) 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No.16:117-123

⁸ 同上 p.118

コミュニケーションに対する積極性 **willingness to communication**(以下、**WTC**)は、第2言語習得への効果が期待されている⁹。第2言語でのコミュニケーションには、異なる文化背景を持った他者とのコミュニケーションを必然的に想定するため、文化を摂取するだけでなく、自分の文化を他者に理解してもらうために努力することを意味する。つまり、コミュニケーションに対する積極性は相互的な異文化理解の根源と言える。¹⁰

学習者の **WTC** を促進させる学習方法を用いることによって、言語運用能力の向上効果がさらに期待できるということである。私の開発した『**D⇔J**』はこのような自己発信に対する意欲を促進させる効果が期待できるのではないかと考えている。

⁹ Dörnyei, Z. (2001) New themes and approaches in second language motivation research *Annual Review of Applied Linguistics*, 21, 43-59

¹⁰ 神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No.15:119-130 p.120

3. 先行作品

3.1 Web 教材

3.1.1 ロゼッタストーン¹¹

本教材は日常会話に焦点をあてて、会話を楽しむことを中心においた学習教材である。多言語対応しているため、多くの利用者がいるようだ。ネイティブの音声や画像データとともに言語を学ぶことができ、また、個人の履歴も残るため、学習者自身が苦手なところを重点的に学習したり、やってみたいところから取り組んだり、と自由度の高い学習環境といえる。また、レベル別に少人数のグループでの会話をすることもでき、それぞれの学習スタイルに合った学習法を確立することもできる。

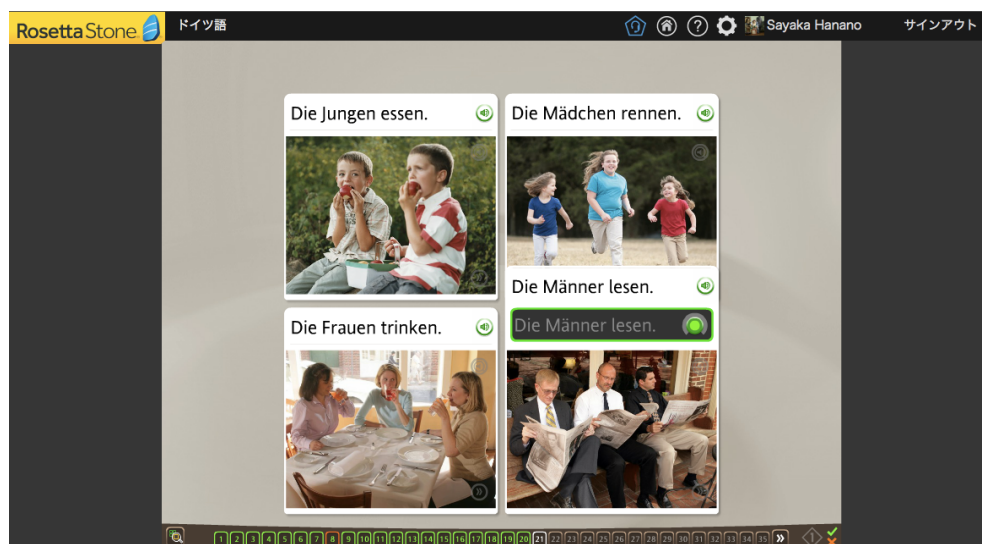


図 5 ロゼッタストーン学習画面

¹¹ ロゼッタストーン http://www.rosettastone.co.jp/other_language/german/(2013/12/10 参照)

また、ドイツ人講師と直接ビデオ会話を通して学習することもでき(図6)、細かい発音の違いや名詞の性や格変化についても指摘してもらいつつ、会話を楽しむことができるため、発話能力やモチベーションの向上につながる教材といえるだろう。このビデオ会話の機能は、各学習者の学習進度に合わせてセクションを選択してその内容に沿って会話を進めるスタイルである。そのため制約のかかった発話練習になり、また学習者3人に対して講師が1人なのでなかなか思い思いの会話はできない。

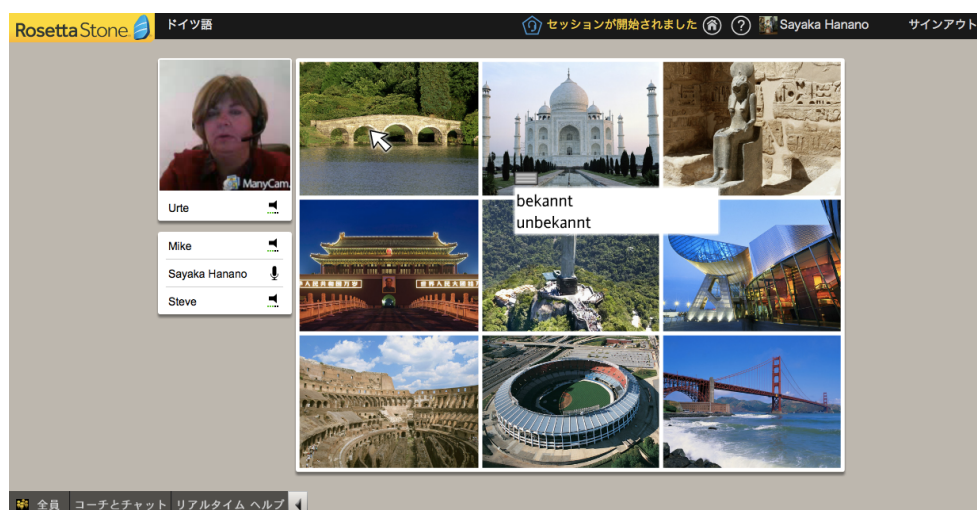


図6 講師との会話練習画面

しかし、『D⇔J』の目的とした日本文化や習慣を学ぶ、というカテゴリーは内包されていない。ただし、ドイツの文化や習慣を学ぶことができるセクションはいくつかある。

3.1.2 東京外国語大学言語モジュール¹²

本 web サイトは d-mode に近いところが多い。発音、会話、文法、語彙の 4 つのモジュールに分類されており、学習者が自由に選択して学習できる。タブレット端末やスマートフォンにも対応しているため、自由度の高い学習環境であるといえるだろう。

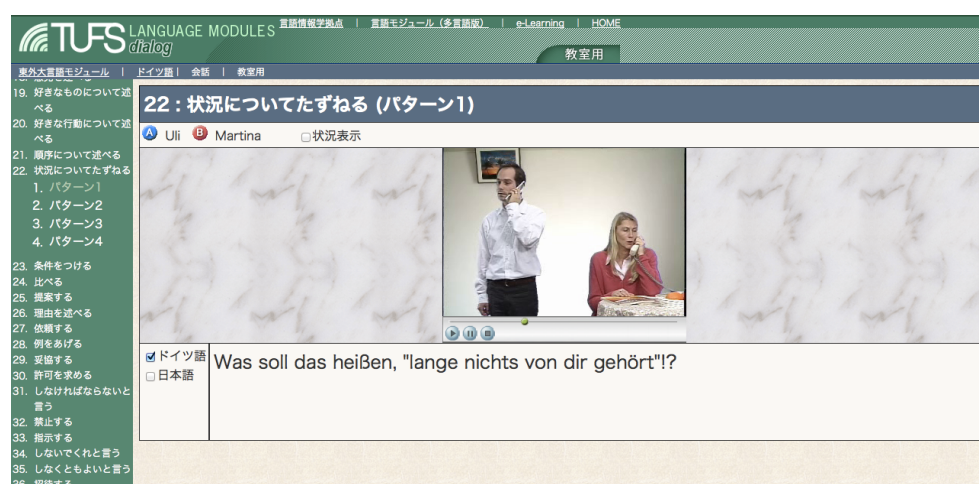


図 7 東京外国語大学言語モジュール(ドイツ語)

しかし、あくまでも授業のサポート教材として利用されているようで、文化などのテーマに触れた部分は見られなかった。

¹² 東京外国語大学言語モジュール

<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/de/index.html>(2013/12/10 参照)

3.1.3 ドイツ語を学ぼう¹³

この web サイトは d-mode の d-Check¹⁴と動作も内容も類似点が多い。セクションごとに右側に“基本を覚えよう”というまとめがついているページが多く、学習者は内容を確認しながらチェック問題を進めることができる。“チェック”ボタンをクリックすると

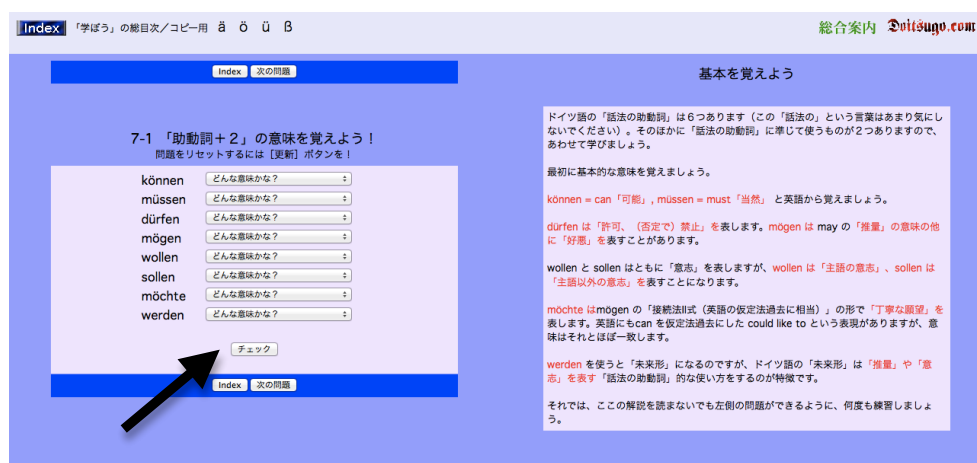


図 8 ドイツ語を学ぼう(助動詞学習画面)

この教材は、文法のみを扱っており、私の作成している『D⇔J』が焦点をあてている部分の学習は補うことは難しいと考える。

¹³ ドイツ語を学ぼう

<http://www.asahi-net.or.jp/~vg5t-ngi/doitsugo/doitsugo-frame.html>(2013/12/10 参照)

¹⁴ ドイツ語学習教材 d-mode の教材群の一つ

3.2 スマートフォン教材(App Store)

3.2.1 翻訳機



言語を選択し単語を入力すると、選択した言語に翻訳される一般的な翻訳のアプリケーションである。このアプリケーションは必要な単語を翻訳する際にはとても有用である。しかし、このアプリケーションは学習教材としてではなく、辞書機能が強いといえるだろう。



3.2.2 Nemo Deutsch



Nemo シリーズは英語、韓国語、フランス語、スペイン語など多くの言語に対応しているアプリケーションである。単語を1対1対応で表示し、音声聞くことができる。基本的な単語に限られており、文化を取り扱う部分は見られない。



3.2.3 入門独単語



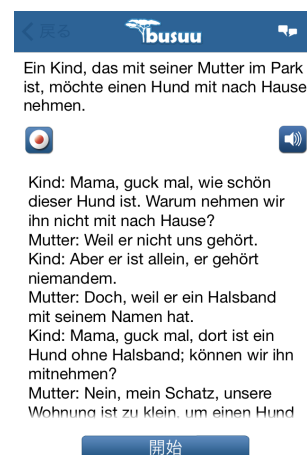
音声を聞き、再生された単語を選択し、ゲーム感覚で暗記を行うアプリケーションである。学習者のスコアを記録し間違えた問題のみを出題する機能があるため、学習者それぞれの弱点となる部分を重点的に学習することができる。タイトルにもある通り、“入門”編なので初級レベルの学習者には良い教材といえるが、文化などに触れる部分はなく、中級・上級者にとっては既存知識の確認に活用できるだけではないだろうか。



3.2.4 busuu



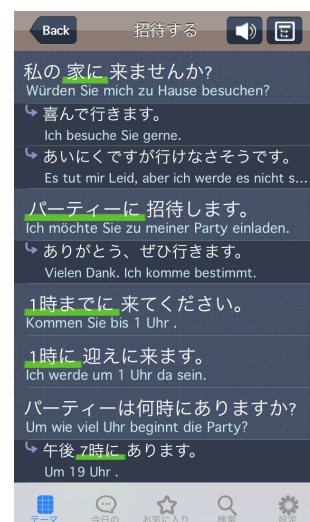
この教材は、A1、A2、B1、B2 の4つのレベルに分けられ、テーマごとの会話を聞くことができるアプリケーションである。写真もついているため、視覚的イメージはとても持ちやすいが、無料・有料に関わらず文化に関するテーマは取り扱っていない。



3.2.5 会話マスター



テーマごとにすぐに使える短い表現を、日本語、ドイツ語、音声で紹介しているアプリケーションである。会話のスピードを選択できる点がこの教材の特徴だが、有料・無料に関わらず文化に関するテーマは取り扱っていない。



3.3 本

3.3.1 『ドイツ人が日本人によく聞く 100 の質問』

この教材は「社会生活・日常生活」「衣食住」「日本の伝統と文化」「政治経済・社会体制」「趣味・娯楽」「日本のさまざま」の7つにカテゴリー分けされているが、テーマページを見てみると図のようになっている。1つの質問に対して6、7行のドイツ語と日本語の文章で回答例が表示されている。絵や写真などは書かれていない。

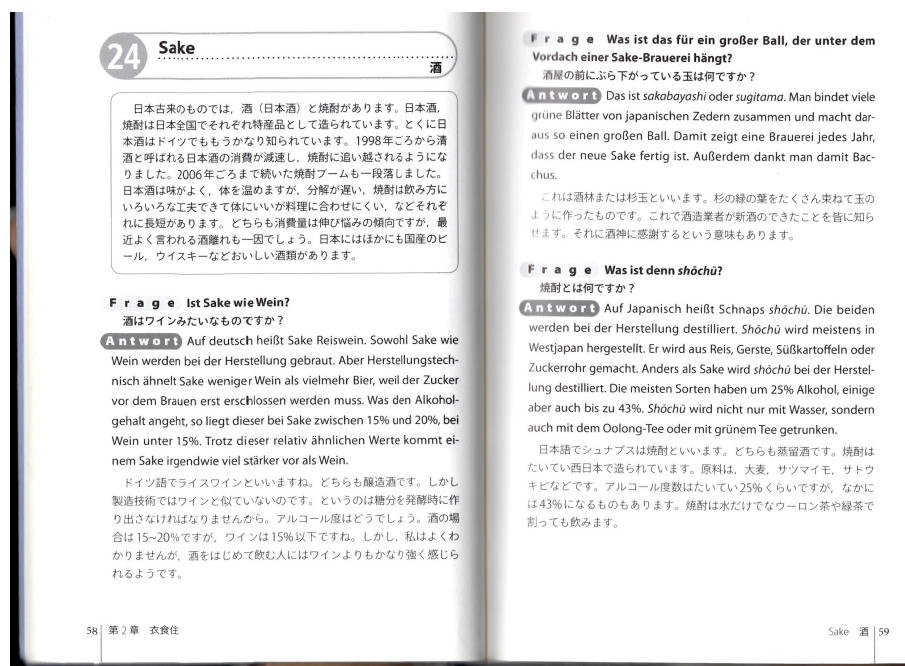


図9 ドイツ人が日本人によく聞く 100 の質問

3.3.2 『日本語から引く 知っておきたいドイツ語』

この教材はドイツ語と日本語が1対1対応の表形式になっている単語帳の形式である。単語間の関連性や使用場面が想定しにくいものとなっている。

人間関係	廃止する	aufheben	アオフヘーベン
		ab schaffen	アッブシャッフエン
	追放する	vertreiben	フェートルアイベン
	排斥する	aus schließen	アオスシュリーセン
	ボイコット	Boycott ㊦	ボイコット
	～する	boykottieren	ボイコッティエレン
	知識・能力		
	知識	Kenntnis ㊦	ケントニス
		Wissen ㊦	ヴィッセン
	能力	Fähigkeit ㊦	フェーイヒカイト
生活		Vermögen ㊦	フェアメーゲン
	教養	Bildung ㊦	ビルトゥング
	学識	Wissen ㊦	ヴィッセン
	知能, 知性	Intelligenz ㊦	インテリゲンツ
		Intellekt ㊦	インテレクト
	才能	Talent ㊦	タレント
		Begabung ㊦	ベガーブング
	知恵	Weisheit ㊦	ヴァイスハイト
	常識, 良識	gesunder Menschenverstand ㊦	ゲズンダー メンシェン・フェアシュタント
	博学の	gelehrt	ゲレーアト
生活	理性	Vernunft ㊦	フェアヌンフト
	～的な	vernünftig	フェアニュンフティヒ
	天分	Begabung ㊦	ベガーブング
	～のある	begabt	ベガープト
	天才	Genie ㊦	ジェニー
	腕前	Fähigkeit ㊦	フェーイヒカイト
	機知	Witz ㊦	ヴィッツ
2. 生活			
睡眠・起床			
生活	睡眠	Schlaf ㊦	シュラーフ
	眠い	müde	ミューデ
	居眠りする	ein nicken	アインニッケン
	あくび	Gähnen ㊦	ゲーネン
	～をする	gähnen	ゲーネン
	熟睡する	tief schlafen	ティーフ シュラーフエン
	安眠する	gut schlafen	グート シュラーフエン
	仮眠	Schläpfchen ㊦	シュレーフヒェン
	昼寝	Mittagsschlaf ㊦	ミッタークス・シュラーフ
	～する	einen Mittagsschlaf machen	アイネン ミッタークス・シュラーフ マッヘン
生活	寝坊する	sich ⁴ verschlafen	フェアシュラーフエン
	夜更かしする	bis spät in die Nacht auf bleiben	ビス シュペート イン ディ ナハト アオフブライベン
	徹夜する	die ganze Nacht auf bleiben	ディ ガンツェ ナハト アオフブライベン
	いびきをかく	schnarchen	シュナルヒェン
	寝言を言う	im Schlaf sprechen	イム シュラーフ シュプレッヒェン
	生活	Leben ㊦	レーベン
	～する	leben	レーベン
	目覚まし時計	Wecker ㊦	ウェッカー
	目覚める	auf wachen	アオフヴァッヘン
	起きる, 起床する	auf stehen	アオフシュテーエン
生活	早起する	früh auf stehen	フリュー アオフシュテーエン

図 10 日本語から引く 知っておきたいドイツ語

3.3.3 『日本文化紹介小和独辞典』

この教材はドイツ語と日本語が1対1対応になっており、さらに追加情報が少し書かれている。情報量もあり、関連性もあるが、情報が詰まり過ぎて決して使いやすいとはいえないだろう。



図 11 日本文化紹介小和独辞典

4. 仮説

日本の文化や習慣は、ヨーロッパ諸国からするとかなり独特なものが多く、そのような文化や習慣を正しく伝えることはとても難しい。さらに、この範囲を学習できる教材や環境がまだ整っておらず、学習者は自ら情報を収集して学習しなければ、得ることができない状態なのである。

学習者が教室内授業だけではなく、それ以外での学習において、学習者それぞれのスタイルの中に本 **Web** 教材の利用を組み込むことで、今まで教室内授業では補いきれなかった“文化や習慣を学び、自己発信する”という範囲を取り入れ、言語習得全体の向上を図ることができるのではないだろうか。

本研究は、学習システムの開発・運用および評価を通してこれらの問題解決を支援するためのシステムを提示するものである。

5. 学習教材『D⇔J』の開発

5.1 教材の目的

海外留学を考えているドイツ語学習者やドイツ滞在中の学習者に対して、翻訳の困難な文化的概念や伝統的行事などを自分の母語以外の言語で表現する際に、その支援となる学習環境を構築し、今まで手薄だった文化や習慣に関するカテゴリーの学習を支援するシステムの構築を目的としている。

また、本教材システムは、利用者の日本文化や習慣に対する更なる興味の喚起も目的としている。文化辞典や **Wikipedia** などとは異なり、多大な情報を一度に提示するのではなく、大学生の視点から、日常性と近いと思われる分野を対象として選定しているため、より実用的なものになるのではないかと考える。そして、既存の外国語会話のビジネス本とは異なり、会話を1文で表示するのではなく、キーワードとなる単語や表現等の短い単位で提示することによって、学習者自身の発話能力を活かして会話の幅を広げていけるのではないかと考えている。

5.2 技術的な手法

5.2.1 語彙の選定と収集

より実践的なドイツ語を身につけられるように、日本での日常生活に即した身近なカテゴリーやテーマを選定した。テーマの選定には大学生への質問調査を元にした。詳細については後に述べる。テーマページの日本語文は、多くの情報を載せるのではなく、より見えそうな内容を選択した。

ドイツ語訳の選択は、主に『アクセス和独辞典』、『プログレッシブ単語帳 日本語から引く 知っておきたいドイツ語』から引用した。

5.2.2 画像の収集

本教材で使用している画像は、筆者が撮影したものを中心に、Web 上のフリー素材を利用した。写真やイラストを用いることによって視覚的イメージと語彙を連動して記憶に定着しやすくするのが狙いである。

特にトップページの画像はそれぞれのカテゴリーを指し示す特徴的な画像を使用し、学習者の日常に近いものを選択した。

5.3 教材制作

5.3.1 デザイン

本教材システムの Web ページは HyperText Markup Language¹⁵ (以下、HTML) と Cascading Style Sheets¹⁶ (以下、CSS) を用いて作成した。作成には、アプリケーション MAMP¹⁷ を利用した。HTML は、Web ページを作成するためのマークアップ言語で、文章の論理構造や表示方法などを記述することができる。また、CSS は web ページのレイアウトを定義する規格で、フォントや文字の大きさ、行間など見栄えに関する情報を記述している。MAMP は HTML で書いた要素を Web 上にアップロードせずに自分のパソコンで作動させることができるアプリケーションで、Apache、MySQL、PHP をパッケージとして一括インストールすることができるソフトである。

基本的な Web サイト全体のデザインは『CSS+HTML Web レイアウト 3rd すぐに使えるアートワーク』を参考にし、所々にアレンジを加えた。

本教材において最も特徴的といえるのは、Hovercard¹⁸ を採用したことである。Hovercard は軽量の jQuery のプラグインでリンクなどをはじめ、様々な HTML 要素にカーソルを合わせると、関連した情報が表示される仕組みだ。本教材では、太字で表示された日本語にカーソルを合わせることで該当するドイツ語訳がポップアップ形式で表示される。初めからドイツ語を表記するのではなく、学習者がアクションを示してからインプット語彙として表示する仕組みにすることで、漫然と内容を読むだけになる危険性を回避し、記憶にも残りやすいと考えている。

¹⁵ IT 用語辞典 e-Words <http://e-words.jp/> (2013/12/10 参照)

¹⁶ 同上

¹⁷ MAMP & MAMP PRO <http://www.mamp.info/en/index.html> (2013/12/10 参照)

¹⁸ Hovercard <http://designwithpc.com/Plugins/Hovercard> (2013/12/10 参照)

5.3.2 全体の構造

本教材システムのページ構造は、①トップページ（図 12）、②カテゴリー群ページ（図 15）、③テーマページ（図 16）の 3 つに分けられる。以下、各ページに関して特徴を示す。

①トップページ

トップページは各カテゴリー群のイメージに合った画像を用意し、写真をクリックするとそれぞれのカテゴリーに飛べるようにリンクを貼ってある。また、マウスオーバーするとカラーバランスの異なる画像が表示されるようになっている。カテゴリーは「食」「文化」「お祭り」「宗教」「伝統」の 5 つに集約した。カテゴリーの選定については②カテゴリー群ページについて、に記す。



図 12 『D⇄J』 トップページ

トップページは写真をメインにした仕様で作成した。文字ではなく画像で作成したことによるインパクトや学習者の興味を引くことを重視したためである。視線が最も集まると予想される画面中央に本 Web 教材のタイトルである『D⇔J』の赤色アイコンを置いた。赤色には心理的に、やる気が出てくる、気持ちを前向きにさせる、といった効果があると言われていたため、タイトル色に採用した。

そして対角線上に d-mode¹⁹ (図 13) と LDP²⁰ (図 14) のリンク画像を反対色である青色を用いて配置することで、全て画像にすることで煩雑な視覚イメージを持ってしまうことを回避した。



図 13 d-mode トップ画面



図 14 LDP ホームページ

また、文字で表記しなくてもカテゴリー選択がわかりやすくなるように、それぞれのカテゴリーに合った画像を採用してリンクを貼った。そして、この画像は、一目で見て何を指しているのかわかりやすくするために、より学習者の日常に近い、想像しやすいものであるように心がけた。

②カテゴリー群ページ

2012 年 6 月頃～2013 年 8 月頃にかけて、本教材のテーマを収集するために男女約 20 名の SFC の学生に口頭質問を行った。この質問で得られたテーマ候補一覧を表 2 に示す。

¹⁹ d-mode トップページ <http://dmode.sfc.keio.ac.jp/>(2013/12/10 参照)

²⁰ LDP ホームページ <http://ldp.sfc.keio.ac.jp/>(2013/12/10 参照)

日本酒	そば	神道	浴衣
醤油	うどん	華道	仏教
味噌	ごはん	茶道	和食
寿司	餅	剣道	富士山
納豆	刺身	柔道	マンガ
豆腐	ひな祭り	歌舞伎	アニメ
お盆	七夕	能・狂言	秋葉原
正月	こどもの日	着物	ファッション
温泉	寺	大仏	おもてなし
桜	神社	侍	京都
大阪	鎌倉	北海道	沖縄

表 2 テーマ候補一覧

この収集したテーマ一覧を、文献等²¹を参考にしつつ、以下表 3~表 8 のようにカテゴライズした。

カテゴリー：日本食			
日本酒	そば	寿司	餅
醤油	うどん	納豆	刺身
味噌	ごはん	豆腐	和食

表 3 日本食カテゴリー

カテゴリー：お祭り			
ひな祭り	七夕祭り	お盆	正月
端午の節句	着物	浴衣	

表 4 お祭りカテゴリー

²¹ 中埜芳之、Oliver Aumann(2008)『日本文化紹介小和独辞典』東京：朝日出版社、
萩野蔵平(Ed)(2003)『プログレッシブ単語帳 日本語から引く知っておきたいドイツ語』東京：
株式会社小学館

カテゴリー：文化			
華道	茶道	柔道	剣道
相撲	歌舞伎	能・狂言	

表 5 文化カテゴリー

カテゴリー：宗教		
仏教	神道	大仏

表 6 宗教カテゴリー

カテゴリー：伝統			
侍	おもてなし	富士山	こどもの日
桜	温泉		

表 7 伝統カテゴリー

カテゴリーに含めなかった内容			
マンガ	アニメ	秋葉原	ファッション
京都	大阪	北海道	沖縄
鎌倉			

表 8 含めなかった内容

関連した語彙としてまとめられる項目は同じカテゴリーに置いた。また、候補に挙げたもののカテゴリーに含めなかった内容については、私の目標としている“文化や習慣を学び、自己発信する”という点と離れていると考えたためである。マンガ、アニメ、秋葉原、ファッションというテーマに関してはサブカルチャーとして世界的にとっても有名になりつつある語彙であり、近年の日本の文化といえるが、言語の背景となるような日本文化とは多少のずれがある。また、鎌倉、京都、大阪、北海道、沖縄というテーマについては、日本古来の文化の残る地域であり、観光地としても多くの外国人が訪れる地域ではあるが、その内容は市販のガイドブックに十分に表記されており、本教材の目的とは異なる。以上の理由から、テーマからは除外した。

以下図 15 に「お祭り」のカテゴリー群ページを例示する。左側サイドバーの内容「日本食」「文化」「お祭り」「宗教」「伝統」が全カテゴリーを示している。カテゴリー群の下には、現在表示しているカテゴリーに内包されているテーマ群を表示している。このカテゴリー群・テーマ群は常に追加・拡大できる成長型データベースシステムとなっている。



図 15 『D⇔J』 カテゴリーページ(お祭り)

③テーマページ

図 16 は「お盆」のテーマページを示している。「故郷に帰る」という太字の単語にカーソルを合わせると、そのアウトプット語彙としてドイツ語の動詞「zurückkehren」が Hovercard の効果によってポップアップ形式で表示され、hovercard 内の再生ボタンを押すことで音声を聞くこともできる。このように、画像データ、テキストデータそして音声データを連動させることにより、学習者がより多様な学習要素を得ることができる学習環境となっている。



図 16 『D⇔J』 テーマページ(お盆)

5.3.3 使用方法

以下に使用方法を示す。

- ① トップページで、学習したい内容のカテゴリーの写真をクリックする。

まず、トップページの写真にカーソルを合わせると図 17 から図 18 のようにカラーバランスが変化する。そして、この振り袖の写真をクリックすると“お祭り”のテーマ群ページ（図 19）にとぶ。

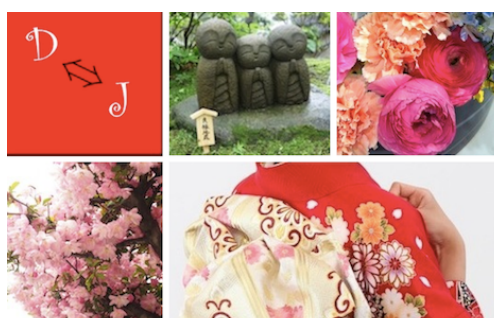


図 17 トップページ



図 18 写真にカーソルを合わせた

②テーマ群の中から、さらに学習したいテーマを選択する。

図 19 のようにテーマ群ページが表示されたら、学習したいテーマをクリックする。



図 19 お祭りテーマ群ページ

③テーマページの内容を読み、太字になっている単語にカーソルを合わせるとドイツ語訳が表示される。

各テーマページには太字の単語や表現が含まれており（図 20）、それらにカーソルを合わせると、**hovercard** の効果でアウトプット語彙としてドイツ語が表示される。（図 21）

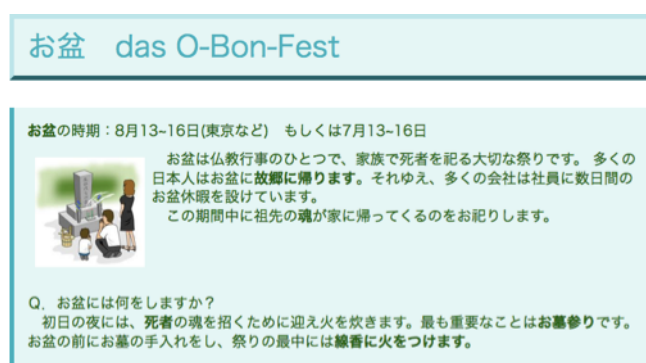


図 20 お盆テーマページ

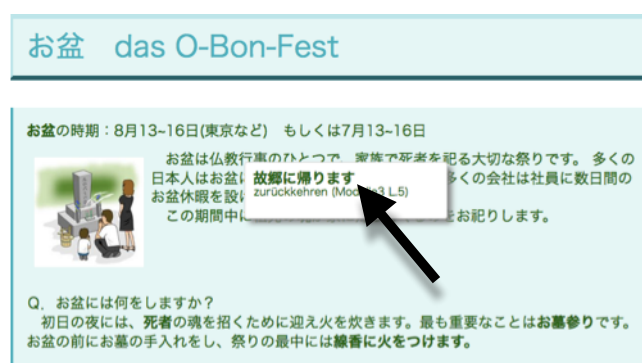


図 21 太字にカーソルを合わせた

6. 実証実験

本教材システム『D⇔J』の運用を踏まえて実証実験を行った。

6.1 被験者

本実証実験において、SFC のドイツ語学習者を 14 名集めた。以下表 9 に被験者一覧を示す。

被験者名	性別	ドイツ語履修暦	海外滞在暦
A	女	G1,G2,G3	カナダ(高校2年時に1ヶ月) イギリス(大学2年時に1ヶ月)
B	男	G1,G2,G3,G5, ドイツ語講義科目	ドイツ(大学3~4年時の10ヶ月) イギリス(大学3年時に6週間)
C	男	G1,G2,G3,G4	
D	男	G1,G2,G3,G4	
E	男	G1,G2,G3,G4	
F	女	G1,G2,G3,G4,G5	ドイツ(大学3年時に1ヶ月)
G	女	G1,G2	アメリカ(高校1~2年時に1年間) ドイツ(大学2~3年時に1年間)
H	男	G1,G2,G3,G4,G5	ドイツ(大学2~3年時に1年間)
I	男	G1,G2,G3,G5, ドイツ語講義科目	ドイツ(大学3年時に1ヶ月)
J	女	B1,B2,G2,G3,G4	オーストラリア(13~17歳の5年間)
K	女	G5	ドイツ(大学2年時に1ヶ月)
L	女	大学4年間	
M	女	G1,G2,G3,G4,G5	ドイツ(大学2年時に1ヶ月)
N	女	G2,G3,G4,G5	ドイツ(大学1年時に1ヶ月、 大学2年時に1年間)

表 9 被験者一覧

表 8 のドイツ語履修歴において **G** とはインテンシブのクラス名を、**B** はベーシックのクラス名を表している。

6.2 実験の仕様

被験者に対して事前・事後アンケートを収集した。アンケートの作成には **Google Drive** のフォーマット機能を利用した。事前・事後アンケートの調査項目に関しては付録に添付する。

被験者には、時間や使用頻度は指定せず、利用できる時間に、気になった内容を学習してもらうこととし、自由度の高い環境で実験を行った。被験者の本教材の使用期間は約 **7~13** 日間となっている。

6.2.1 事前アンケート

事前アンケートの内容について以下表 10 に示す。詳しくは付録に添付する。

番号	質問内容	回答形式
1	ログイン名	記述式
2	ドイツ語学習歴	チェックボックス
3	海外滞在経験	記述式
4	滞在中に日本について話す機会の有無	ラジオボタン
5	話した内容について	チェックボックス
6	具体的にどのような内容を話したか	記述式
7	d-mode を知っているか	ラジオボタン
8	いつ使用したか	記述式
9	本教材に期待する効果は何か	記述式
10	日本文化や習慣に対する興味・関心度合	スケール評価

11	日本文化や習慣に対する知識の度合	スケール評価
12	詳しく知りたいと思う日本文化や習慣は	記述式

表 10 事前アンケート質問内容

本 Web 教材によって期待される効果として、日本文化や習慣を正しく学び、自己発信する能力をつけることができると考えているため、質問 10、質問 11、質問 12 の項目をつけ、事前・事後でどのような変化が見られるかを計る。また、海外滞在経験のある被験者に対しては、質問 4、質問 5、質問 6 を通して、実際に日本についてどのような内容が話題に上がったのかを調査した。

6.2.2 事後アンケート

事後アンケートの内容について以下表 11 に示す。詳しい内容については付録に添付する。

番号	質問内容	回答形式
1	ログイン名	記述式
2	使用頻度	ラジオボタン
3	テーマごとの文章量	スケール評価
4	印象的だった内容	記述式
5	継続して使用したいか	スケール評価
6	日本文化や習慣に対する興味・関心度合	スケール評価
7	日本文化や習慣に対する知識の度合	スケール評価
8	詳しく知りたいと思う日本文化や習慣は	記述式
9	サイト全体の見やすさ	スケール評価
10	追加してほしいコンテンツ	記述式
11	留学前に使用したいか	ラジオボタン
12	その理由	記述式
13	本教材はどのような場面で役立つと思うか	記述式
14	期待していた効果は得られたか	記述式

15	ご意見・ご質問など	記述式
----	-----------	-----

表 11 事後アンケート質問内容

本 web 教材を使用したことによって得られた学習効果を質問 6、質問 7、質問 8、質問 11、質問 12 で調査し、本教材のインターフェースそのものの評価を質問 3、質問 4、質問 9、質問 10 を通して調査した。

6.3 実験結果

6.3.1 事前アンケート結果

事前アンケート回答者は計 14 名。14 名のうち海外滞在経験がない被験者は C,D,L の 3 名、ドイツ以外の国の滞在経験がある被験者は A,E,J の 3 名、ドイツへの短期留学経験のある被験者は F,I,K,M の 4 名、ドイツへの長期留学経験のある被験者は B,G,H,N の 4 名である。

また、質問 6 の海外滞在中に日本について話した内容の中に“文化や伝統”があった被験者は A,B,E,F,G,H,I,J,K,M,N の 11 名で、海外滞在経験のある被験者全員が話す機会があったと回答している。既存教材ではあまり扱われていない“文化や伝統”の範囲ではあるが、実際には海外滞在中にこの内容を自己発信する機会が多いことが明らかになった。つまり、本 Web 教材を留学前に使用しておくことは学習者が文化接触場面において遭遇すると考えられる“日本について自己発信する”機会に対して事前準備段階で学習できるため、有効に働くと考えられる。

質問 10、質問 11 についてそれぞれのスケール評価の結果を表 12 に示す。

被験者名	ドイツ留学	その他滞在経験	質問 10	質問 11
C			9	4
D			10	7
L			9	2
A		カナダ、イギリス	7	5
E		イギリス	6	3
J		オーストラリア	9	5
F	短期		4	3
I	短期		9	6
K	短期		6	4
M	短期		9	4
B	長期	イギリス	10	6
G	長期	アメリカ	10	6
H	長期		6	3
N	長期		8	6
全体平均			8.0	4.57

表 12 事前アンケート結果（抜粋）

事前アンケートから見られることは、海外滞在経験が長いほど日本に対する興味も知識も評価が高くなるのではないかと、ということだ。特に大学入学以前に海外滞在経験がある被験者 **G,J** は全体平均よりも質問 10、11 共に高い評価をつけていることがわかる。また、2 カ国以上の滞在経験を持つ被験者 **B,G** も評価が高いことがわかる。また、留学経験のあるものの中で比較すると、期間が長い **G,J,N** が2つの質問に対して評価が高い。より多くの文化接触経験によって文化の違いを肌で感じ、さらに興味が喚起されるのではないだろうか。

また、多くの学習者は日本文化や習慣に対して興味や関心は高いものの、知識の度合は低いと認識している。質問 9 の「本教材に期待することは」という記述式質問に対して、“自分が知っていると思っていた「日本」を、本当の意味で理解できるようになる。（知ったかぶりのことがあるため）” “実際、伝えられるほど知らなかった日本の伝統を知ることができるドイ

ツ語を楽しく学ぶことができる”という意見が得られた。つまり、本 Web 教材を通して、高い興味や関心を示しているこの分野への知識を得られることを期待できると感じているようだ。

6.3.2 事後アンケート結果

事前アンケート回答者のうち、事後アンケートの回答者は計 11 名。未回答の A,H の 2 名は、本 Web 教材にアクセスができないという不具合が生じていたためである。後にその原因を記す。

被験者名	質問 6	質問 7
B	10	5
C	10	3
D	8	8
G	10	6
H	4	4
I	7	6
J	9	5
K	7	4
L	8	5
M	8	4
N	8	7
全体平均	8.09	5.18

表 13 事後アンケート結果（抜粋）

全体平均としては、興味関心度合も認知度合もどちらも評価が上がっている。しかし、個人個人の変化を見てみると、期待していたほどの効果は見られなかった。

本 Web 教材で扱っている内容はそれほど多くはないが、その中でも各学習者にとって知らなかった内容やあまり意識していなかった内容も含まれていたようだ。

また、質問 11 の留学前に使用したいと思うか、という問に対しては 6 名がはい、と回答しており、まず日本語で理解してから発話に活かせる、留学時に説明できなくて苦労した内容が載っていた、など留学前の準備段階の支援教材として有用であると感じる学習者が多く、本教材への期待が多く見られた。一方で 2 名はいいえ、と回答している。その理由としては辞書や Google 検索の方が多くの情報が載っている、机上の勉強と話す内容は違う、といった意見だった。

6.3.3 Web 教材の不具合について

実証実験を通して、本教材にアクセスできないという不具合があることが判明した。Windows の Internet Explorer で本教材にアクセスすると図 22 のような画面が表示される。

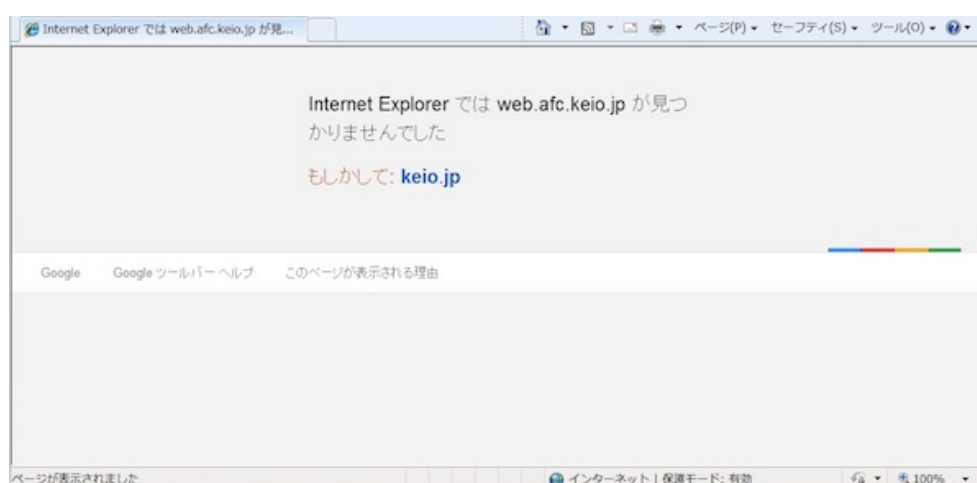


図 22 不具合が表示されたページ

この原因を探ると、プログラミングに問題があることがわかった。一部を図 23 に示す。このプログラムは、スマートフォンからアクセスすると

スマートフォン専用ページにとぶ、という指示であるが、Windows の Internet Explorer でアクセスした場合のみ、この指示が邪魔をしていたようだ。

```
43 <p><a href="http://dmode.sfc.keio.ac.jp/">line03_01</a></p>
44 </div>
45 <div id="line03_02">
46 <p><a href="#">line03_02</a></p>
47 </div>
48 <div id="line03_03">
49 <p><a href="../layout2/matsuri.html">line03_03</a></p>
50 </div>
51
52 <script type="text/javascript">
53 if (((navigator.userAgent.indexOf('iPhone') > 0 && navigator.userAgent.indexOf('iPad') == -1) ||
54 navigator.userAgent.indexOf('iPod') > 0 || navigator.userAgent.indexOf('Android') > 0)) {
55 document.getElementById("gotosmart").style.display = 'block';
56 }
57 </script>
58
59 </body>
60 </html>
61
```

図 23 トップページプログラミング（一部）

よって、図 23 のプログラムを削除することでこの不具合は解決した。

6.3.4 考察

インターフェースの評価について、事後アンケートの質問 3 における文章量の 5 段階評価は平均 2.64 となり、やや少なめだという評価だった。今後テーマごとの内容充実も検討する必要があると思われる。また、サイト全体の見やすさについての 5 段階評価は平均 4.2 となった。しかし、画像が小さいので拡大できる機能が欲しい、トップページがどこに飛ぶのかわかりにくい、などという意見もあったため、再検討が必要だろう。

「留学には、教室で起こる言語学習と社会で起こる言語学習(Noels, K.A. 2003)をつなげる働きがある。」(田中、2012)と述べられているように、留学の経験そのものによって語学習得度合に変化が見られることは示されているが、本実証実験を通して、留学の経験の有無、そしてその期間の長さによって、日本の文化や習慣に対する興味・関心にも変化が生まれると想定できる。

また、“日本の文化や習慣”という今まであまり注目されて来なかったカテゴリーに焦点をあてることで、学習者に新たな気づきを与え、ドイツ語で伝えることを想定して学びを促進することができたのではないかと考える。

本 Web 教材の使用によって、日本文化や習慣に対する興味関心度合にはあまり変化が見られなかったものの、事後アンケートの記述式質問において“日本の文化についてすこし詳しくなること、それをドイツ語で簡単に説明できるようになることの二つが可能になったと思います。”や“改めて、日本の文化を知るという意味では期待した効果が得られたと思う。しかし、もう少し多くの単語のドイツ語訳をつけてもらえるとドイツ語の勉強ができ、さらにドイツ人に「説明する」ということができるようになると思う。”など教材の効果を期待できる意見が見られた。

しかし、一方で“日本文化を説明する時に必要なドイツ語の単語を学習できることを期待していましたが、中々知りたい単語が載っていないことや単語を見ることはあっても『覚える』という段階に行くには難しいと感じたので効果は実感できませんでした。”や“単語よりもフルセンテンスで勉強したい”のような意見も見られ、本 **Web** 教材の改善すべき点も新たに浮き彫りになった。また、学習したい内容について、サブカルチャーを取り入れてほしいと言う意見が多く、今後追加を検討するべきかもしれない。

また、「留学経験によって流暢さが身に付くと言われており (Collentine, 2009)、留学前の準備状況により留学中の第2言語技能への自己評価が異なると考えられる。」(田中、2012)と述べられているように、留学前の準備段階の重要性は示唆されている。事後アンケートの質問 11 において留学前に本教材を利用してみたいと答えた学生はとて多く、本教材の有用性が期待できるだろう。

7. 今後の展望

7.1 音声データの追加

本 Web 教材において、現在音声データは収録していない。収録した後のプログラム自体は完成しているため、早急にデータを収集し、学習者が発音も同時に学べるシステムに仕上げる必要がある。本教材で取り上げている単語の多くは教室内授業でも扱われていないものが多いため、自律学習を支援するためには音声データを付けて、自己発信の際に使えるようにしなければならないと考えている。

7.2 カテゴリーやテーマの充実

本 Web 教材のカテゴリー群、テーマ群は、今現在必要だと思われる内容を集めて作成した。そのため、今後日本文化や習慣が世界中で広く知られるようになるにつれて発信すべき内容も刻一刻と変化していくと想定される。従って、カテゴリーやテーマは追加・削除を繰り返し検討していかなければならないだろう。特に「日本食」は 2013 年 12 月にユネスコ無形文化遺産として認定されたため、今後より一層の内容充実が必要となるのではないかと考えている。

7.3 スマートフォンや携帯電話への対応

現在、本 Web 教材はパソコンでの利用を推奨している。スマートフォンでは利用可能だが、画面サイズが小さいため、とても見にくくなってしまっからだ。より多様な学習環境へ対応させることによって、学習者それぞれの学習スタイルにとけ込んだ教材へと進化させることが可能であると考えているため、スマートフォン専用サイトの確立が望まれる。

7.4 Web に頼らない、学習アプリケーションの開発

本教材は海外研修中の学生にも有効に利用できると考えている。その際、特にインターネット環境が整っていない場所にいる時に、異文化交流を計る機会にも簡単に利用できるようにするためには Web に頼らないスマートフォン等のアプリケーションが利用者にとって最も使用しやすいのではないだろうか。ダウンロードしてしまえばいつでもどこでも自由に学習でき、確認作業も簡単にできる、そのようなアプリケーションが私の理想的な学習教材の形である。

7.5 多言語対応

日本人学習者が他言語を用いてコミュニケーションをする機会はドイツ語に限らず、様々な言語での異文化交流において想定されうる。現在はドイツ語のみの対応であるが、英語や中国語など様々な言語での需要もあると考えられるため、言語を追加するごとに利用者の増加が期待できると考えている。

また、諸外国の日本語学習者にとっても有用な教材になると考えているため、多言語対応することでこの教材を通して直接日本文化を知ってもらう機会を作ることができるかもしれない。

8. 参考文献・参考 web サイト

【参考文献】

- ・ 浦晋亮(2012)『英語で発信する日本小辞典 Encyclopedia of Japan』東京：IBC パブリッシング株式会社
- ・ 永井千鶴子、野原章雄、加沼毅一、青木美智子、Peter Bachhaus(2009)『ドイツ人が日本人によく聞く 100 の質問』東京：株式会社三修社
- ・ 萩野蔵平(Ed.)(2003)『プログレッシブ単語帳 日本語から引く 知っておきたいドイツ語』東京：株式会社小学館
- ・ 中埜芳之、Oliver Aumann(2008)『日本文化紹介小和独辞典』東京：朝日出版社
- ・ 渥美聡子(2012)『CSS+HTML Web レイアウト 3rd すぐに使えるアートワーク』東京：株式会社技術評論社
- ・ 在間進(Ed.)(2012)『アクセス和独辞典』東京：株式会社三修社
- ・ 在間進(Ed.)(2012)『アクセス独和辞典』東京：株式会社三修社
- ・ Noels, K.A.(2003) Learning Spanish as a second language: learners' orientations and perceptions of thier teachers' communication style. In Z. Dörnyei(Ed.), Attitudes, Orientations, and motivations in language learning(pp.97-136). Malden: Blackwell Publishing
- ・ 岡田敦美(2013)「初習外国語としてのスペイン語の授業や教材のあり方と、社会や文化に関する理解について：学生の要望や教科書の使い方の分析」Media and Communication Studies, 64:21-37
- ・ 田中佑美(2012)「異文化理解を目指した動機付け研究の展開」神戸松陰女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No.15, 119-130
- ・ 張慧芬(2013)「外国語教育における文化元素の導入について-初級レベルの学習者を中心に-」神戸松陰女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 No.16:117-123
- ・ Dörnyei, Z. (2001) New themes and approaches in second language motivation research Annual Review of Applied Linguistics, 21, 43-59

【参考 web サイト】

- ドイツ語研究室 ドイツ語履修概要
<http://deutsch.sfc.keio.ac.jp/umriss.html> (2013/12/10 参照)
- d-mode ドイツ語を自分で学べる web サイト
<http://dmode.sfc.keio.ac.jp/>(2013/12/10 参照)
- ロゼッタストーン
http://www.rosettastone.co.jp/other_language/german/(2013/12/1 参照)
- 東京外国語大学言語モジュール
<http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/de/index.html>(2013/12/10 参照)
- ドイツ語を学ぼう
<http://www.asahi-net.or.jp/~vg5t-ngi/doitsugo/doitsugo-frame.html>
(2013/12/10 参照)
- IT 用語辞典 [e-Words http://e-words.jp/](http://e-words.jp/)(2013/12/10 参照)
- MAMP & MAMP PRO <http://www.mamp.info/en/index.html>
(2013/12/10 参照)
- Hovercard <http://designwithpc.com/Plugins/Hovercard>
(2013/12/10 参照)
- d-mode トップページ <http://dmode.sfc.keio.ac.jp/>(2013/12/10 参照)
- Learning Desing Project ホームページ <http://ldp.sfc.keio.ac.jp/>
(2013/12/10 参照)

9. 図表一覧

【図】

- 図 1 ドイツ語履修モデル
- 図 2 SFC 教室内授業サイクル
- 図 3 対象言語以外の要素を学びたい理由
- 図 4 文化や社会に関する情報とは何か
- 図 5 ロゼッタストーン学習画面
- 図 6 講師との会話練習画面
- 図 7 東京外国語大学言語モジュール(ドイツ語)
- 図 8 ドイツ語を学ぼう(助動詞学習画面)
- 図 9 ドイツ人が日本人によく聞く 100 の質問
- 図 10 日本語から引く 知っておきたいドイツ語
- 図 11 日本文化紹介小辞典
- 図 12 『D⇔J』トップページ
- 図 13 d-mode トップページ
- 図 14 LDP ホームページ
- 図 15 『D⇔J』カテゴリーページ(お祭り)
- 図 16 『D⇔J』テーマページ(お盆)
- 図 17 トップページ
- 図 18 写真にカーソルを合わせた
- 図 19 お祭りテーマ群ページ
- 図 20 お盆テーマページ
- 図 21 太字にカーソルを合わせた
- 図 22 不具合が表示されたページ
- 図 23 トップページプログラミング(一部)

【表】

表 1 Modelle に掲載された日本文化や習慣に関する語彙

表 2 テーマ候補一覧

表 3 日本食カテゴリー

表 4 お祭りカテゴリー

表 5 文化カテゴリー

表 6 宗教カテゴリー

表 7 伝統カテゴリー

表 8 含めなかった内容

表 9 被験者一覧

表 10 事前アンケート質問内容

表 11 事後アンケート質問内容

表 12 事前アンケート結果(抜粋)

表 13 事後アンケート結果(抜粋)

10. 謝辞

本研究を進めるにあたり、大学1年次よりドイツ語科目を通して熱心にご指導いただいた藁谷郁美総合政策学部教授に深く感謝申し上げます。また、慶應義塾大学 Marco Raindl 講師にはドイツ語面で、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス研究所訪問所員松原弘典氏には技術的な側面で多くの助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

藁谷・ラインデル合同研究会 LDP のみなさまとは、個人個人の様々な研究を通して、お互いに刺激し合い、協力をしつつ研究を進めることができたことをとても誇りに思います。

また、本研究における実証実験に協力してくださったみなさまも、お忙しい中お時間を取っていただき、とても貴重な意見をくださったこと心より感謝致します。

最後に、私を一番近くで支え、導き、時には厳しい態度で示してくれた両親、祖父母に感謝し、謝辞とさせていただきます。

2014 年 1 月 20 日

慶應義塾大学 総合政策学部 総合政策学科 4 年

花野沙也香

付録

付録1 事前アンケート

このフォームを編集

『D⇔J』事前アンケート

この度は被験者を引き受けてくださり、ありがとうございます。教材使用前にアンケートを取らせていただきたいと思います。

このアンケート結果に関しましては、教材開発研究にのみ使用させていただきます。

ご協力どうぞよろしくお願い致します。

***必須**

ログイン名を教えてください。*

ドイツ語の学習歴を教えてください。*

☐ B1

☐ B2

☐ G1

☐ G2

☐ G3

☐ G4

☐ G5

☐ その他:

海外滞在経験はありますか？またその期間と目的を教えてください。

〈例〉①アメリカ、2~4歳の2年、親の転勤 ②ドイツ、大学2年次の1ヶ月、短期留学etc...

(海外滞在経験のある方)滞在中に日本について話す機会がありましたか？

☐ はい

☐ いいえ

以下の当てはまるものにチェックをしてください。

- ☐ 地震、原発
- ☐ 地形
- ☐ 和食
- ☐ 文化や伝統
- ☐ 音楽
- ☐ サブカルチャー
- ☐ 大学
- ☐ 文学
- ☐ 宗教

☐ 日本語

☐ その他:

上記の質問では、具体的にどのような内容を話しましたか？

サブカルチャー→漫画の話題について、文化や伝統→お正月についてetc...

ドイツ語学習サイトd-modeをご存知ですか？また使ったことがありますか？＊

- ☐ 知っていて、使ったことがある
- ☐ 知っているが、使ったことはない
- ☐ 知らない

使ったことがある方は、いつ、どの程度使用しましたか？

〈例〉G1の履修中に週1~2回程度、etc...

本教材『D⇔J』ではどのような効果が期待できると思いますか？

日本の文化や習慣に対して、どの程度興味がありますか？＊

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全く興味はない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とても興味がある

それに対してどの程度、ご自身は知識があると思いますか？＊

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全くない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもある

詳しく知りたい、触れてみたい、という文化や習慣はありますか？いくつでも自由にお書きください。

〈例〉お盆の習慣について知りたい！ etc...

送信

Google フォームでパスワードを送信しないでください。 100%: 完成しました。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Powered by
 Google Drive
[不正行為の報告](#) - [利用規約](#) - [追加規約](#)

付録2 事後アンケート

 このフォームを編集



『D⇔J』 事後アンケート

本教材をご使用いただき、ありがとうございました。いかがでしたでしょうか？
事後アンケートにもご協力をお願いいたします。

また、本アンケート結果は教材開発研究にのみ使用させていただきます。内容からご本人様を特定
することはありませんので、ご協力のほど、よろしくお願い致します。

*必須

ログイン名 *



期間中にどの程度使用しましたか？ *

☐ 1日2回以上

☐ 1日1回

☐ 2日に1回

☐ 3日に1回

☐ その他:



1テーマごとの文章量はいかがでしたか？ *

1 2 3 4 5

少ない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ 多い

最も印象的だった内容はなんですか？ *



継続して使用してみたいと思いますか？ *

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全く思わない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とても思う

日本の文化や習慣に対してどの程度興味がありますか？ *

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全く興味がない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とても興味がある

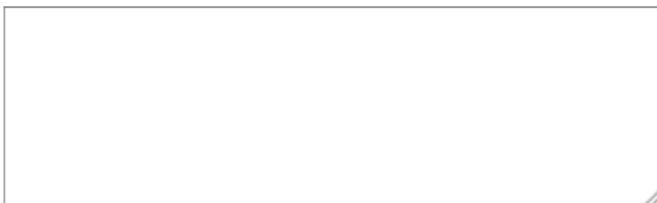
それに対して、ご自身はどの程度知識があると思いますか？ *

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

全くない ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とてもある

詳しく知りたい、触れてみたい文化や習慣はありますか？いくつでも自由にお書きください。*

事前アンケートでも伺いましたが、今現在、あなたが知りたいと思う内容をお答えください。事前アンケートと重複しても構いません。



サイトの見やすさはいかがでしたか？ *

1 2 3 4 5

とても見にくい ☐ ☐ ☐ ☐ ☐ とても見やすい

何か追加してほしいコンテンツはありますか？詳しく教えてください。 *

日本の住宅事情、交通についてetc

（ドイツ留学経験のある方）ドイツ留学前に本教材があったら、使用してみたかったと思いますか？

- ☐ はい
☐ いいえ

その理由を教えてください。

本教材はどのような利用場面で役立つと思いますか？ *

本教材を使用する前に期待していた効果は得られたと思いますか？ *

本教材に対して、何かご意見、ご質問等ありましたらご自由にお書きください。 *

送信

Google フォームでパスワードを送信しないでください。

このコンテンツは Google が作成または承認したものではありません。

Powered by
Google Drive

[不正行為の報告](#) - [利用規約](#) - [追加規約](#)